通称"ジャンボタニシ"の沖縄県への導入について

嘉数　清

昭和56年10月31日付け沖縄タイムス朝刊に"養殖の成長株オオタニシ"という見出しの記事が写真入りで報道され、その後テレビにも取り上げられたことから、ジャンボタニシと称する淡水性巻貝が新しい養殖種として注目を集めるようになった。そのためこの貝の養殖相談に水産試験場を訪ねて来る人や電話をかけてくる人が多くなっている。すでにこの貝を飼育している人もかなりいるが、実数ははっきりしない。

ジャンボタニシを沖縄に初めて導入したのは赤嶺信一氏である。同氏よりも先に観賞用としてはすでに導入されていたとも言われるが、養殖対象種として導入し積極的に各地へ種貝を供給したのは赤嶺氏である。同氏の話によると、氏は昭和55年10月にシンガポールからジャンボタニシの幼貝を15個持ち帰り、翌56年８月には約１kg、10月に約15kgの親貝を同じくシンガポールから導入し、糸満市大里の池で飼育、繁殖の後、昭和57年５月までに他府県へ17kg、県内各地へ約30kgの種貝を販売した。その価格はkg当り５万円であった。

このほか、ジャンボタニシは昭和56年11月及び57年４月に台湾から石垣へ導入された。また長崎県の種苗販売業者からジャンボタニシの種苗を購入した沖縄の業者もいるようである。

本県で飼育されているジャンボタニシは殻や肉が黒いものが多いが、黄色の殻や肉を持つ種類も導入されている。これらはいずれもリンゴガイ科（又はリンゴタニシ科）に属するとされ、黒いものの学名は *Ampullarium canaliculatus Lamark* であるという。黒い方と黄色のものは、同種とも異種とも言われている。

この貝は野菜で飼育することができ比較的生長も速いことから注目されているが、今後この貝の養殖が安定的に発展するかどうかは予断を許さない。それは、この貝が新しい種類であるために我が国における市場性がまだはっきりしないからである。台湾では数年前にこの貝の養殖ブームが起ったが、結局養殖業としては定着せず、現在では水田作物の害敵として国家的に駆除している状況である。

この貝の繁殖力は旺盛である。肉も旨い。この貝の養殖が発展することを願うものであるが、自然水界では水生植物の害敵となる危険性が大きいため、飼育に当たっては逃亡防止に十分な配慮が必要である。